

認識的モダリティの数値化試論
—manabaを用いた言語調査—
Quantification Essay on Epistemic Modalities :
A language survey using manaba

福盛 貴弘
FUKUMORI Takahiro

abstract

The purpose of this paper is to identify criteria by scoring against epistemic modalities. This is because there are limitations in explaining language in words alone, and it would be preferable for a controlled study to have other criteria. A questionnaire was administered to the students and they were asked to enter a score for the epistemic modality. The results showed a relative difference of 'hazuda' > 'daroo' > 'kamo-sirenai'. This result was similar for both Japanese and international students, confirming the existence of relative numerical differences for the three modalities.

1. 序

モダリティの意味や用法の用語が、諸氏によって様々な名称になるのは今に始まったことではない。例えば、概言と呼ぶか、認識的モダリティと呼ぶかといった区分に関する名称や、それぞれ個々の用法に対する名称でも、表1のような違いが見られる。

表1：諸氏によるモダリティの用法の名称の違い

	益岡・田窪 (1992)	井上 (2002)	風間 (2011a)
はずだ	証拠のある推定	当然性判断	確信
だろう	断定保留	推量	推量
かもしれない	可能性	蓋然性判断	可能性

これはこれで議論すべきものではあるが、本稿では、こういった定性化の違いについて言及するわけではない。本稿の目的は別の点にある。例えば、多言語対照を試みた風間 (2011a) のような試みをする際に、日本語を元にして翻訳した場合に、その用法がきれいに対応して他の言語で翻訳されたかどうかについて、他の面から検証できないかという点である。この指標として、ことば以外で用法の違いが分かればいいのではないかと考えた。

仮に確言を発する際には、益岡・田窪 (1992: 117) では、「話し手が真であると信じていることを相手に知らせ」とされている。これを、話し手が10のうち10の自信をもって発言していると仮定する。この基準を元に、「はずだ」「だろう」「かもしれない」では、どの程度の自信を持っていると判断するのかについて、アンケート結果から数値化を行なうことにする。

2. 方法

manabaによるアンケート機能を用いて、言語学概論 (3 年次開講、2019-2020年度) 受講生からデータを収集した。「太郎がパンを食べた。」という文を発する時、真であるという自信が10である場合、以下の形式

は10段階評価でどの程度の自信があるのかを確認することにした。被調査者には、10～1の数値で入力してもらっている。

- a. 太郎がパンを食べたはずだ。
- b. 太郎がパンを食べたのだろう。
- c. 太郎がパンを食べたのかもしれない。

3. 結果

有効回答数は、日本人90名、留学生21名であった。

受講者数に対する回答者数の割合は、2019年度は61.2%（41/67）、2020年度は86.4%（70/81）であった。

3.1. 平均点数

有効回答者の単純集計の結果を表2に示す。なお、この3群の点数差については、日本人、留学生共に、ホルム法の多重比較で有意差（日本人MSe=4.0311, 留学生MSe=2.1048, * $p<.05$ ）が検出された。それぞれの分布については、図1～図2で示す。

表2：モダリティに対する点数

	日本人			留学生		
	M	SD	Md	M	SD	Md
a. はずだ	7.49	1.51	8	8.76	0.89	8
b. だろう	6.40	1.82	6	6.38	1.32	6
c. かもしれない	4.56	2.52	4	4.76	2.19	5

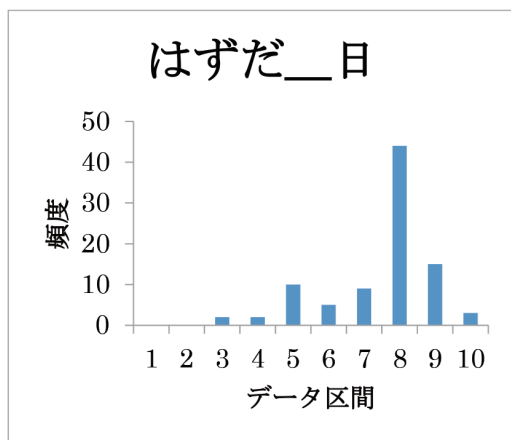


図1－1：日本人「はずだ」の点数分布

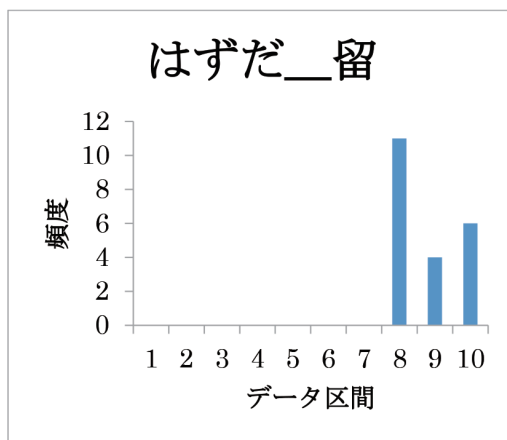


図2－1：留学生「はずだ」の点数分布

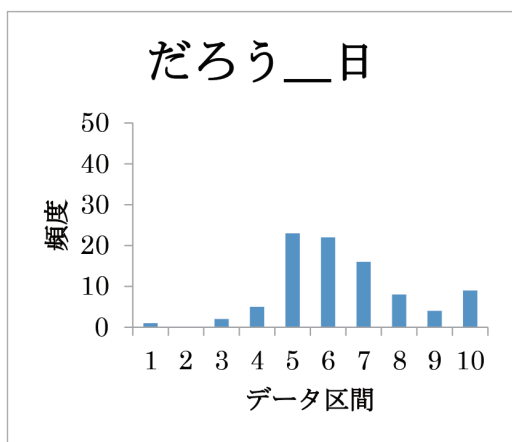


図 1-2：日本人「だろう」の点数分布

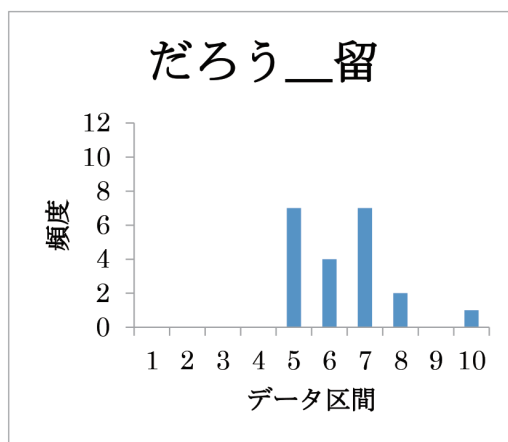


図 2-2：留学生「だろう」の点数分布

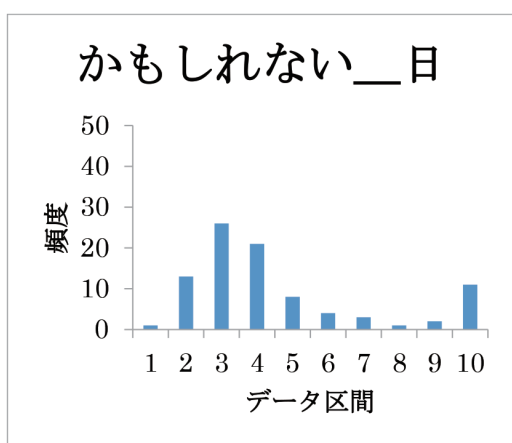


図 1-3：日本人「かもしれない」の点数分布

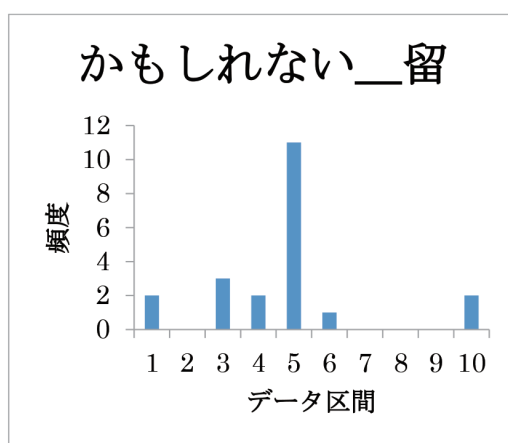


図 2-3：留学生「かもしれない」の点数分布

3.2. 順位付け

今回の3例では、点数が相対的に $a > b > c$ になるという仮説の元に作成している。その点が実際にどうであったかという結果を表3に示す。

表 3：モダリティ間の点数の順位付け

順位付け	日本人	留学生
$a=b=c$	1	0
$a=b>c$	3	0
$a>b=c$	2	2
$a>b>c$	60	17
$b=c>a$	8	1
$b>a>c$	1	0
$c>a=b$	2	0
$c>a>b$	2	1
$c>b>a$	3	0

4. 考察

4.1. 回答者としての適切性

aを10としたのは、今回の結果では日本人1名、留学生6名であった。こちらから提示したどの程度自信があるかという問いかけが、被調査者に上手く伝わらなかった可能性が考えられるものの、確言との差をつける方が適切だと考えられる。ただし、「はずだ」という形式を用いても、真と信じて発言している可能性をぬぐいきれないので、aを10としたもののデータは除外しなかった。

これに対して、bやcを10とするのは適切ではないと判断した。「だろう」「かもしれない」については、確言やaよりは数値が下がることが予想されるからである¹。そこで、この2つに10をつけたデータを除外して再計算した結果（日本人77人、留学生19人）を表4に記す。

表4：モダリティに対する点数の補正結果

	日本人			留学生		
	M	SD	Md	M	SD	Md
a. はずだ	7.49	1.43	8	8.84	0.87	9
b. だろう	5.87	1.36	6	6.21	1.05	6
c. かもしれない	3.66	1.37	3	4.21	1.36	5

なお、この3群の点数差については、日本人、留学生共に、ホルム法の多重比較で有意差（日本人MSe=1.7904, 留学生MSe=0.9152, * p<.05）が検出され、平均点数による順位付けについては補正前と変わらない²。中央値については、日本人の「c. かもしれない」が4から3に、留学生の「a. はずだ」が8から9に変わった。

4.2. 命題を真とみなす度合い

本調査で得られた点数については、絶対的な尺度というよりは、形式の違いに対して相対的に差があることの方が重要であると考えている。「a. はずだ」>「b. だろう」>「c. かもしれない」間の点数の差に、統計的な有意差があるので、話者が真と考えている程度には数的差異があると捉えられる。これが、質的な差と関連すると推測しているが、詳細な関連付けについては本稿では扱わない。

また、a>b>cタイプが多数派を占めていた点からも、この順位付けが規範に準ずると考えられる。

b>aのように逆転するタイプについては、データを精査した。

(1) b=c>a

→回答者に問題あり？

「はずだ」の場合は、直接経験による証拠をもって、話し手は真とみなす度合いを判断しているのだが、その直接経験による証拠が必ずしも信ぴょう性が高いかどうかについては、文脈判断となることが想定できる。文脈無しでの内省では、被調査者がどのような場面を想定したかによって、点数に違いが出てくるだろう。今回の調査では、「のだろう」を用いた影響で、こちらの方が真とみなす度合いが高くなっている被調査者がいることは、ある意味やむを得ない結果だといえる。

しかし、「かもしれない」が「のかかもしれない」になったとしても、証拠有りの推定と単なる可能性を示している者が逆転する点については、筆者は理解しがたい。b>aは許容できるが、c>aは許容しがたいということである。c>aが成り立つと、実際のコミュニケーションにおいて、相当な齟齬が生じていると推測できるからである。このあたりについては、文法研究や語用論研究の成果を待つことにしたい。

(2) $b > a > c$

→回答者に問題はなさそう。

「だろう」の方が「はずだ」よりも真に近いと捉えている日本語母語話者が1割程度いるというのが内省結果である。このあたりの個人差は、実際のコミュニケーションにおいて、若干の齟齬が生じているかもしれない。 $b > a$ は、規範文法としては誤りであるが、「だろう」を推量としても話者が真だと考えている度合いに幅があり、確信をもって発言している可能性があることを、理解しておいた方がいいということである。

4.3. アルタイ型言語における認識的モダリティ

以下では、風間（2011a）によって、多言語における言語形式を対照するための試みから、アルタイ諸語についてのみ引用する³。トルコ語（例文ではト）は菅原（2011）、モンゴル語（例文ではモ）はジンガン（2011）、ナーナイ語（例文ではナ）は風間（2011b）からのものである。

<確信> 彼らはもう着いたはずだ。

ト onlar artık ulaşmış olmalı.

malı義務

モ ödiid xüreed baigaa ni lavtai.

ni lavtai確信

ナ əsi isigogilaiči.

gila義務

<推量> あの人は今日はたぶん来ないだろう。

ト bugün belki gelmeyecektir.

ecek未来

モ ter önödör barag l irexgüi baixaa.

baixaa推量

ナ ŋoani čimana jidəsi bijərəə.

jərəə未来

<可能性> さあ、昼間だからあの人は家にいるかもしれないし、いないかもしれない。

ト bilmem, evde olabilir, olmayabilir de.

abil可能

モ ter gertee baij č magadgüi, baixgüi č baij magadgüi.

magadgüi可能性

ナ əsi ini, ŋoani joogdo abaa bijərəə.

jərəə未来

それぞれについて、言語形式が異なる場合は、先の点数との関連付けも容易である。しかし、同一の形式となる場合は、果たして日本語を元にした翻訳でその違いがあらわれているのかどうか、すなわち真とみなす度合いの違いがあらわれているのかどうかについて確認しにくいといった問題がある。この点が、気になる場所である。

また、トルコ語については、この3つについては、形式が異なるが、拘束的モダリティが関わってくると、義務「なければならない」、評価的義務「べきだ」と、確信「はずだ」が同じ形式である義務形のmalı～meliを用いる。この場合、形式だけでは真とみなす度合いの違いは分からなくなる。また、その違いがないのなら、適切な翻訳になっているとはいいたい。副詞や連用修飾や数量詞などで、そのあたりを補っているのだとしたら、点数化した基準も含めた方が、より精度の高い対照になるのではないかと考えられる。ことばをことばで説明することの限界はあるので、他に尺度や基準を設けた方がよいということを述べておきたい。なお、風間（2011a）に見られる一連の試みは貴重な対照研究用の資料であるので、その価値を貶めるために述べているわけではないことは付記しておく。

5. 結語

モダリティの用法が形式で異なる場合は、質的に定量化するだけでの議論でも支障がないように見受けられるが、同じ形式で複数の用法を兼ねて文脈判断となる場合、ことばでの説明以外の方略を検討する必要があると考えている。点数化はその1つの方略として、様々な言語における共通の尺度になるのではという提案である。

ただし、この点数は絶対評価としての定量化というよりは、他の形式や用法との相対差が重要であると考ええる。その違いをもって、諸言語の翻訳や対象の際に便宜的に利用できると思われる。

「はずだ」と「にちがいない」に差があるか、拘束的モダリティもその拘束の度合いを点数化できるか、などについては今後の課題としたい。

注

- 1) 現代日本語文法研究会第17回大会(2021.3@Zoom)のコメントで、「のだろう」「のかもしれない」といったように「の」が入っていると、真(=10)に近い数値になりうるとの指摘があった。個々の脳内では、点数の相対差が異なっている人がいるので、細かい要因を考えると、こういった点も考慮する必要がある。ただし、平均と順位付けに影響を与えるほどではなかった。
- 2) 同研究会のコメントで、「だろう」は、学生は使わず、「と思う」になりがち、「はずだ」は半事実では使うけれども、「はい」の方が使うのではないかという指摘があった。学生を被調査者にした場合、理解形式ではあるが、使用形式ではないという指摘である。このあたりが点数の付け方に影響している可能性はあるが、平均点数による相対差には影響を与えるほどではなかった。
- 3) 同研究会のコメントで、「だろう」≠「のだろう」であり、「の」があると証拠性があるという前提になるため、10になりうるという指摘があった。筆者はそれでも10になるとは思えないので、今回は除外したが、平均による相対差には影響がなかったので、個人差として受け入れる必要があるとは感じた。また、「はずだ」が証拠なしでも使えるので、 $b > a$ はありうるという指摘もあった。それは想定する場合次第なので、筆者もありうると考えている。
- 4) 本学で開講している日本語学科の「言語学概論」の資料として、学生に提示しているものの一部である。

参考文献

- 井上優(2002)「モダリティ」大西拓一郎編(2002)『方言文法調査ガイドブック』科学研究費成果報告書133-150.
- 風間伸次郎(2011a)「特集 モダリティ まえがき」『語学研究所論集』16: 29-55.
- 風間伸次郎(2011b)「ナーンイ語のモダリティ」『語学研究所論集』16: 57-74.
- 菅原睦(2011)「トルコ語のモダリティ」『語学研究所論集』16: 193-202.
- ジンガン(2011)「モンゴル語」『語学研究所論集』16: 149-157.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版